「下村満子の生き方塾」ニュース vol.32 2022.12

—2021年12月 中川・元自民党幹事長特別講演—

地球を救うのは自然エネしかない

———— テーマは「どこへ行く　日本と世界」

「下村満子の生き方塾」は2021年12月6日、原自連（原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟）、城南信用金庫と共に、東京・五反田の城南信用金庫本店で、原自連副会長の中川秀直・元自民党幹事長さんを講師に招いた特別講演会を開きました。講演タイトルは「どこへ行く？日本と世界」。中川さんは地球誕生から、人類の生存が危機的状況にある地球の現実まで、豊富なデータを駆使して、「自然エネルギーこそが地球を救う唯一の手段だ」と熱っぽく訴えました。（文責・皆川猛）

城南信金本店で開かれた中川・元自民党幹事長の特別講演会

● 壮大なテーマ ワクワクする

主催者を代表し、下村満子「生き方塾」塾長は次のように挨拶しました。

—原自連、城南信金、「生き方塾」の三者合同による中川秀直先生の特別講演に多数の方が出席していただき、ありがとうございます。きっと「どこへ行く？　日本と人類」という講演タイトルに魅かれたのではないかと、思います。このタイトルはスケールが大きな壮大なテーマであり、何が出るのかとてもワクワクしています。中川先生の話を聞くのは初めてで、普段は講演することの方が多い小泉純一郎元首相も出席されています。短い時間ですが、先生のお話からこれからの生き方、行動のあり方などを考えるヒント、きっかけを得てもらえれば、幸いです—

小泉さんあいさつ 中川さんの必死の説得で総理になった

続いて立った小泉元首相は次のように来賓を代表してあいさつしました。

—残念ですが、前からの約束があり、中座しなければならず、最後まで中川先生の話を聞けません。今あらためて思えば、中川先生がいなければ、私は自民党総裁、内閣総理大臣にはならなかったことでしょう。総裁選に立候補しようと自ら手を挙げたことはありません。初めて総裁選に出馬したのは1995年9月です。橋本龍太郎さんの無投票当選だと思われていましたが、中川先生を筆頭に若手が、無投票では党の活性化にならない。小泉なら落選しても

傷つかない、と変な理由で私を担ぎ出そうとしました。
　総裁選に立候補するには20人の推薦人が必要ですが、せいぜい10人ぐらいだろうと、思っていたので、20人集まったらその時あらためて考えると返事しました。すると20人が集まってしまいました。今さら引き返せないので、立候補しましたが落ちてしまいました。でもなぜかすっきりした気分でした。2度目の立候補派は98年7月。橋本さんは参院選敗北の責任を取って不出馬を表明し、小渕恵三さん、梶山清六さん、そして私の3人が立候補し、小渕さんが当選。私は最下位でした。小渕さんは任期半ばで急逝し、後継になったのは森喜朗さんでしたが、森さんは任期半ばで辞めざるをえなくなり、2001年4月に急遽、総裁選となりました。この時には、橋本さん、麻生太郎さん、私が立候補し、298票を取って当選しました。
　この3度目の総裁選のエピソードです。2回負けているので、今度負けたら推薦者は冷や飯を食う。それでもいいのか、と出馬を促す面々に言いました。中川さんたちは、そんなことは気にしません、私が落選したら議員バッジを外しますとまで言って、私に出馬して欲しいと説得するのです。またある日、田中角栄さんと偶然顔を合わせると、角さんは「小泉さん。出なさいよ。男なら立たなくては駄目だ」と出馬を促されました。渋谷のハチ公前で演説したら、大勢の人が耳を傾けていたので驚きました。全国どこに行っても、黒山の人だかりで思いかけずに、総裁に選ばれました。7月の参院選でも勝利したので、9月の総裁選本選挙は無投票となりました。中川先生の説得がなければ、総裁にはなれなかったのです。彼とは今、原発ゼロ社会を目指して、全国行脚を共にしていますが、話を聞くのは初めてです。途中で退席せざるをえませんが、皆さんには最後まで聞いてほしいと思います―

軽妙な口調で総理に就いたいきさつを語る小泉元総理

　共催の原自連を代表して河合弘之幹事長は次のように挨拶をしました。
　―中川さんとは原自連が縁となって知り合いました。彼は権謀術数が渦巻く政界で長年活躍した人ですが、少年のような素直な明るい心の持ち主で、とても好きです。もっと政治家を続けてほしかった。今日は中川さんが何を考えているのかを知ることができる機会ですので、講演を心待ちしていました。きっとワクワクする話でしょう―

中川さん講演　地球に戦争を仕掛けている人類

● 異常なまでの人類繁殖

　開会あいさつの後、中川さんは「どこへ行く？　日本と人類」と題して講演しました。要旨は次の通りです。
　・内閣官房長官、科技庁長官、原子力委員会委員長、自民党の政調会長、幹事長などを務めましたが、東日本大震災、東電福島第一原発事故が起きた2011年の翌年2012年、政界を引退し、吉原毅さんが会長を務めている原自連の副会長をしています。このほかに、地球共同体実現を目指し世界の484機関・団体が加盟している財団に籍を置いています。先日も地球温暖化対策の一人者であるゴア元アメリカ副大統領とリモートではありますが、地球の未来、原発問題、脱炭素などについて意見を交わしました。ゴアさんはこのままでは、人類はそう早くないうちに絶滅する、と語っていました。
　・地球上の生物の絶滅は、隕石による6600万年前の「恐竜絶滅」が有名ですが、隕石の危機はとても身近なものなのです。2019年7月25日、直径130㍍ほどの小惑星が地球に、7万2千㌔㍍までに接近しました。地球に落ちれば隕石になります。7万2千㌔㍍の距離は、地球と月の距離の5分の1で、天文学者にとってはニアミスなのです。直径130㍍の隕石は6600万年前の隕石との80分の1の大きさです。
　・NASAは隕石になるかもしれない小惑星を観察していますが、800メートル以上のものしか観察できていません。これは小惑星の1割しか把握できていないということです。1908年シベリア上空で、直径50～60㍍の隕石が爆発しました。これはツングースカ大爆発と呼ばれており、原爆数百発分の被害が出ました。ニューヨーク、東京都区内よりも広い面積で森林が燃え上がりました。2年前の隕石が都会に落ちたら、どれほどの被害が出たか、想像もできません。今の技術では小惑星の大部分を占める100㍍級の隕石は、衝突するかどうか直前にならないと分からないのが現実です。充実した観測態勢が必要です。
　・私はいつも、生物は絶滅の危機に直面していると考えています。「奇跡の星」と呼ばれている地球は、それぞれの国や地域、人類だけのものではないと考えています。地球の歴史を学ぶと、地球はいつも宇宙と一体のものだと分かります。人類は今こそ慎ましく生きなければならない、という認識に立つ必要があります。奇跡の星を危うくする、害する行為を取り除き、素晴らしい生命の星を守ることが義務です。地球市民は地球共同体の一員として新しい経済、社会を運営しなければならないことを肝に銘じる必要があります。
　・もう残された時間はありません。2030年までのこれから10年間で、デジタル革命、緑の革命、脱炭素、脱原発を推し進め、地球生物共同体をどう維持するのかの具体的な方策を作らなければなりません。
　・この10年間で、地球学、人類学、生物学、物理学、微生物学は急速に進歩し新たな事実が次々に判明しています。地球の誕生は46億年前で、宇宙の誕生は138億年前のビッグバン。2008年にはカナダのケベック付近で42億年前の玄武岩地層が見つかっています。また南アフリカ・ヨハネスブルク付近には20億年前に落ちた隕石跡があります。これは最古かつ最大のもので、隕石の直径は

12キロメートルです。落ちた時はマグニチュード20の地震が起き、水爆200万発が同時に爆発したと同じ衝撃があったらしい。

・これまで地球上では幾たびか生物絶滅があったことが分かっています。最大の絶滅は2億５千万年前の古生代にありました。当時地球は大大陸一つと海で構成され、大噴火が随所で起き、大地は砂漠化していました。さらに噴火によってマントルが変化し、液体金属の対流が激変。これによって地磁気の南北が逆転して、宇宙から地球に降って来る太陽風、宇宙線が激増し、生物を大量死させました。また雲も大発生し、氷河期を招いたのです。これは「宇宙線」の冬と呼ばれています。噴火や隕石、宇宙環境の変化などにより、この後もしばしば生物は絶滅しています。

・先ほども話した恐竜絶滅です。6500万年前メキシコのユカタン半島に、直径が10～15キロメートルの隕石が落下しました。これはビッグ・ファイブと呼ばれています。3300億トンの硫黄ガスが発生し、東日本大震災の1千億倍の地震エネルギーが襲いました。半径1500キロメートルで火災が発生し、800キロメートルが津波に襲われました。厚い雲が覆い、日照不足と硫黄ガスによって恐竜はあっという間に死に絶えました。またこの隕石と同じくらいの隕石がいつ落ちてもおかしくはないのです。

・人類は700万年前、アフリカで誕生した類人猿が始まりで、何度か絶滅を繰り返しながら、今日に至っています。注目すべきことは、世界人口79億人のDNAは皆同じであることでしょう。現代人の祖先が登場した5万年前の地球総人口は1万人で、今は79億人。異常なまでの繁殖ぶりです。日本は3万3千年前、シベリアからやってきた人がルーツであることが化石や遺跡で判明しています。人類は大火山爆発のたびに氷河期を迎え、日本でも12万年前、北海道と九州でカルデラ火山爆発を経験しています。7300年前の鹿児島県沖のカルデラ爆発で、西日本の縄文人は絶滅しました。

・アメリカのイエローストーンでは巨大なマグマだまりが観測されており、これが大爆発を起こしたら、全政界規模でかつてない惨状となると予測されています。

・歴史を紐どくと、大火山爆発の後には氷河ができて食糧不足なります。すると動乱や戦争に発展します。181年ジャワ島での火山爆発では、中国の場合、漢が滅びて三国時代に入り、14世紀のヨーロッパでのペスト大流行は寒冷期に入ったために起きた食料不足が要因です。フランス革命も不順天候による飢餓が原因です。つまりこの世は想定外の事象に満ち溢れているのです。また、人類が生存できるのは植物の光合成によって2600億トンの酸素ができているからです。酸素量の増減によっても、生物は何度も絶滅したことがあります。

・こうしてみると大宇宙の中で地球はまさに「奇跡」であり、生物もまた「奇跡の存在」です。しかし、人類はいつの間にか、奇跡の事象の中で生きていることを忘れて、卵の殻のような極めて薄い地表の上で贅沢、資源浪費、環境破壊をし続けています。生かされていることを忘れて、化石燃料の浪費、危険と同居の原発、核兵器開発、ミサイル競争など、自ら自分の生命の危機を招いています。国連のグテーレス事務総長は「人類は地球に戦争を仕掛けている」と表明しています。

「想定外」として誰一人も自己の責任取らない

● 快適生活は1万人だけ

・食料の偏在も顕著になっています。グテーレスさんは、地球温暖化は地球にとっては感染症と同じで、このままでは不毛の大地が増え続け、人類が住めない地が大幅に増えると警鐘を鳴らしています。科学者の多くは、2030年以降は資源、食料は持続不可能な事態に陥ると話しています。2年前の統計では世界では8億人が飢餓に苦しみ、この一方では価格調整のために先進国では食料の3分の1、日本では毎年600万トンが捨てられています。飽くなき肉消費は水資源枯渇を招き、世界では7割の地下水が枯れると予測されています。

・温暖化は人類絶滅のシナリオを描きます。今世紀末に1・5度の気温上昇なら、何とか持ちこたえることができますが、最も現実的な2・5度上昇の世界になると、海面上昇、食料不足などによってナショナリズムがはびこり、世界は協調できない社会になります。貧富の差は拡大し、貧困国を中心に人類は増え、世界人口は120億人になります。3・6度上昇の世界は北極圏の氷は全て融け、50年に一度の熱波は毎年起きます。最悪の4・4度上昇になると、ほとんどの人は暑さで亡くなり、富裕層を中心にした生き残った1万人が快適な生活をできるというものです。

・地獄のような暑さでシベリアの永久凍土は融け、眠っていた未知のウイルスが息を吹き返し、北極海のメタンハイドレードから大量のメタンガスが放出されます。未知のウイルスははるかに強力な感染症を引き起こすでしょう。酸素供給のアマゾンの熱帯雨林はサバンナ化して、海面上昇で日本の砂浜の９割は水没します。人類３分の1は死亡し、地球は「熱帯の星」になってしまうのです。

・しかし、温暖化対策は遅々たるもので、間に合いそうもありません。

先月11月、イギリススコットランドで開かれたコップ26では、温暖化の原因である二酸化炭素削減目標の上乗せをできず、さらに火力発電での石炭燃焼削減を努力目標に後退させました。これは日本が強く働き掛けた結果です。

・では新たなエネルギーを何に求めるかです。それは自然エネルギーしかありません。小泉さんは保守ながら、脱原発運動の先頭に立っています。小泉さんは福島第一原発の大事故を目の当たりにして、原発の三大大義名分、すなわち絶対安全、安い発電コスト、二酸化炭素を出さないクリーンエネルギーが嘘だと分かったからです。安全の砦と言われた多重防護はもろくも崩れ、発電コストは核廃棄物処理費用を含めるととてつもなく高くつき、発電から出るゴミを安全に処分する方法がないから、クリーンエネルギーではありません。

・私が小泉内閣の官房長官になったのは２６年前の1996年1月初めです。当時は原子力委員長を兼ねていました。その頃、稼働したばかりの高速増殖炉の「もんじゅ」が事故を起こしたのですが、それを事業者は隠していたために、原子力政策、核燃料リサイクルは批判を浴びていま

した。この後始末のために、何度も現地に足を運び、説明責任があるとして反対派も含めた円卓会議を10回ほど開いて、事態の収拾を図りました。原発をめぐる当時の組織は、規制と推進が一体だったので、規制と推進を切り離す組織改革に取り組みました。

・私も小泉さんと同じように、原発の三大大義名分を信じ、核燃サイクルは絶対必要だと考えていました。ところが福島の原発事故を見て、原発の安全神話はあっけなく崩れ、小泉さんと同じように、三大大義名分は嘘だと分かりました。それまでの原発推進は全く間違っていたと心から反省し、償いの意味で原発ゼロを実現したいと、最善の努力をしたいと思っています。

・小泉さんが言っていることをまとめてみます。1979年に大事故を起こしたアメリカのスリーマイル島原発には、いまだに人が入れません。86年に巨大事故を起こした旧ソ連・チェルノブイリ原発は、後始末ができずに、石棺で蓋をするだけで、半径30㌔㍍は立ち入り禁止です。これほど原発は事故を起こすと、収拾できないのです。

・福島原発はどうでしょうか。最大16万人が被災して故郷を追われ、今でも4万1千人が帰還できていません。核燃料デブリはスリーマイルの7倍に当たる880トンあると推定されていますが、どうして処理をするのか検討段階にあり、事故の原因すら究明されていません。東電や国は津波のせいにしていますが。東電の技術者は地震で重要な配管は壊れて冷却水が流出した、と話をしています。今年2021年2月の地震で原子炉内の冷却水水位は下がるなど不安定な動きを示すなど、依然としてどうにもなりません。

メルトダウンは想定外と言えるでしょうか。それにもかかわらず、関係者は皆、想定外のこと、として誰一人責任を取っていません。使用済み核燃料を取り出せたのは、事故がなかった4号機だけで、2，3号機の蓋は7京ベクレル。近づいただけでも、あっとういう間に死んでしまいます。これではデブリを除去することはできません。チェルノブイリと同じように石棺しかないと言う学者もいますし、東電も最近になって石棺方式をにおわせています。

・150万㌔㌢級の原発が1年稼働すると、原爆4個分のプルトニウムができます。ところが日本は放射能汚染に無関心、無責任です。福島の事故ではＩＡＥＡによれば、陸上には広島級原爆200発分、会場には1千発分の放射能が

今こそ自然エネを最優先課題にと、熱っぽく訴える中川さん

放出されました。ピーク時には福島県内はもとより、東京まで放射性物質が飛んだのです。

・福島第一原発は、台地を40㍍ほど削って造成したため、地下水脈に極めて近く、流動化、液状化しやすい敷地です。だからデブリを取り出さない限り、放射能を含んだ汚染水は永久に発生し続けます。汚染水から放射性物質を取り除いた水を処理水と呼び、海洋に垂れ流すことになりましたが、処理水には取り切れない物質がたくさん残っています。汚染した地下水は地中に浸透しますから、放射能を帯びます。この汚染土をどうするのか方策は立っていません。除染も山林ではしないし、帰還困難地域をなくすために、この除染は非常に広範囲になってしまい、これをやれば中間貯蔵施設はすぐに満杯になります。除染、廃炉の費用は当初は５兆円と試算されましたが、毎年膨れ上がり、今では84兆円となっています。

・日本では原発事故の際の住民避難を軽視しています。事故の後、外国は自国民に対して、直ちに日本から離れるように指示しました。ところが日本政府は、事故は大したことではないと、矮小化を図り続けました。この体質は改善されず、最悪の事態を想定した訓練は行っていません。原発は危険な施設なのに、管理もずさんです。柏崎原発は原子力規制委員会から、管理の不備を指摘され、再稼働は認められていません。茨城県の東海第二原発は避難対策がなっていないと、裁判所から運転差し止めを命じられています。全国17の原発サイトでしっかりした避難計画があるところはどこにもありません。

知らないふりをする人が世界滅ぼす

● 2周遅れの日本のエネ政策

・震災国日本なのに、地震への安全対策も甘いのが日本です。原発の耐用年数は40年とされていたのに、60年に引き上げられ、耐震基準は240ガルです。2008年の岩手宮城県沖地震では、402ガルを観測し、過去10年間に4か所で700ガルを超える地震を観測しています。東電はこうした経緯を無視していたから、大事故になったわけです。昨年2020年、大阪地裁は関電大飯原発３，４号機に対する原子力規制委員会の地震評価が甘いと、再稼働OKを取り消しました。

・原発で出るゴミも問題です。処分できる施設がないから、各原発は水を張ったむき出しのプールに使用済み燃料を入れているだけです。そのプールも7割は埋まっています。世界で妥当だと思われる処分場はフィンランドに１か所あるだけ。フィンランドは地盤が固く安定しているからできるのですが、火山国・震災国・日本にはそんなところはありません。ゴミすら処分できない原発を動かすことは、犯罪なのです。

・こうした中で、世界は、原発を抜いて環境に負荷をかけない自然エネルギーに軸足を置いています。太陽光発電は10年間に80倍となり、原発100基分を発電しています。これに風力を加えれば1500基分となります。2050年には自然ネルギーは現在の7・5倍、総エネルギーの86%と見込まれています。太陽光発電のコストは10年間で10分の1に下がっています。10年後には20分の1になる予想で、1㌔㌢の発電コストは3円。安全対策費を入れた原発の発電コスト16～20円ですから、いかに太陽光発

電が安いかが分かります。自然エネルギーの不安定さをカバーするバッテリーもこれから10年間で４０分の1になります。

・ではなぜ、今自然エネのコストが高いのでしょうか。それは電力会社が送電網を開放していないからです。動いていない原発のために送電線をあけているのです。原発は電力会社にとって大きな利益を生むから、自然エネに使わせないのです。経産省はこの夏、原発20％程度依存のエネルギー基本政策を打ち出しましたが、世界各国からは２周遅れの政策と批判されています。

・核燃サイクルもやめるべきです。「もんじゅ」は動いていないし、青森県六ケ所村の再処理施設もトラブル続きで本格運転の目途はたっていません。たとえこの施設がフル稼働しても、各原発にたまっている使用済み燃料や廃棄物をすべて処理することはできずに、プルトニウムを作り出すだけです。プルサーマルを実施できる原発は４基だけで、その燃料であるMOX燃料を作る技術は日本にはありません。しかもMOX燃料はウラン燃料より１０倍も高い。世界各国では使用済み燃料の再処理をやめる流れにあり、アメリカはすでにやめました。イギリスは来年やめます。フランスもやめる予定です。使用済み燃料は原発敷地内に保管倉庫を設け、厳重に隔離した上で、乾式貯蔵するのが一番安全です。

・繰り返しになりますが、健全な地球を取り戻す必要があります。WWF、ユネスコは2020年5月、あと100年で世界では100万種の生物が消滅すると報告しました。人間が欲望を貫くことは、地球にとって有害そのものです。命とは何か。３７兆個の細胞は一つ一つが命を持ち、細胞の集合体が人間なのです。植物の光合成によって人間は生きている。多様性、協調を忘れてはいけません。地球生命体としての自覚が求められています。

・温暖化対策として、コップ26では国境型炭素税を検討しましたが、合意はできず、2050年二酸化炭素排出ゼロを宣言したのは3か国だけでした。日本は宣言できず、温暖化対策の送電網開放ではスペインより20年遅れです。日本は悪しき前例主義、危機感なしにより、先進国で最下位集団にいます。

・これからの社会はどうするのか。まずは大規模工業型農業から生態系依存の小規模農業への転換が必要です。資源を守るため、化学燃料から自然エネのエコサイクリングに重点を移す。グローバル資本主義から地域共存経済へシフト替えすべきです。

・アインシュタインは言います。「悪い行いをする人が世界を滅ぼすのではなく、それを見、知っていながら何もしない人が世界を滅ぼす」今から、行動をしましょう。

◇

閉会挨拶は吉原毅城南信金元理事長が次のように行いました。

―今日は「下村満子の生き方塾」、原自連、城南信用金庫の３者共催で、中川先生の特別講演会を開くことができました。多数の出席に感謝するとともに、先生のおっしゃったことを肝に銘じ、各人が自分のステージで動くことを祈っています―